

情報科に職を得た定年教授

金沢大学長 青野 茂行

昨年の春、定年になった友人から電話があった。いろいろしゃべりたいことがあるらしいので、訪れることにした。彼は東京郊外の某私大に勤務をはじめて、その情報科を担うことになったのである。これから話のために彼の計算機歴を簡単に記しておこう。

彼こそは日本の第一世代である。日本に計算機の影も形もないとき、彼は既にアメリカで真空管のマシンをまわしていた。金沢大学にMシリーズが入った頃、彼から突然電話があって、「オレのところにこんなシステムが入るよ。どうだ！お前の怒る顔が見たいよ。」と自慢した。彼は永い間、日本の計算機の後進性にいらいらしていた。例えば、東大のHITAC-5020Eの頃、この機械が当時のIBMの同型機に性能が一ケタ以上劣ること、それにもまして、ただ一行のエラーメッセージをもらうために半日を空費することに我慢がならなかったらしい。これの設計者的一人が彼の同級生であったこともあるって、随分激論をたたかわせたようだ。そのせいもあって、5020Eは八倍長計算などという特異な性能をもっていた。最近になって、某所に彼はスーパーコンピューターを導入した。そして晴れ晴れとした顔をして、永い間の胸のつかえが降りた、と言った。

その彼が某私大の情報科の中心になった。はじめに彼が言うには、その情報科には有名人が沢山あつめられたが、どいつもこいつもコンピューターのコンの字も知らないのだそうである。彼にかかると、その辺で情報で飯を喰っている連中もキワモノだらけになる。そこで私は、「オレも入れてもらうんだったな。そしたらナンバー2になれたろうに。」——これは少しは本音である。やがて彼はボツリと質問した。「キミ、UNIXって知っているか。」彼の権威も少し時代がかってきたようだ。

彼は流行のネットワークなるものの設計にはいった。某私大の電子計算機システム一般とLANである。彼の考えを各電子計算機メーカーに示して、それに対する提案を募ったのである。メーカーの名称を仮にA, B, C, Dとしよう。彼にいわせるとA社以外は全部落第だという。その落第の方からの説明を聞こう。

「B社はなぁ、オレの言い分を完全に無視しゃがったんだよ。そして当社としてはくかくのものを提案します、ときた。それ自体はそれほど悪いものではなかったが、これがお客様に対する態度か。その前にオレの考えをどう思ったか、聞かせてもらいたかったよ。」

「C社はなぁ、当りをとったパソコンばかり扱いできやがった。中学校ならともかく、大学なんだから（オレンとこの学生はそこいらの中学生と実はどっこいだが）、たまには程度の高いことをやりたいよ。あそこのパソコンは単体として使った絶対的な能力が不足しているのだ。」

「D社にいたってはなぁ、そこにソフトなるものがあるのかなあ。オレの要求に目を白黒して彼らはそこいらのソフトをかき集めたらしい。それが計算機とLANで二系列になってしまったんで、ぶら下がるハードもそれに応じて動くというわけ。」

「その点A社はえらいよ。彼らはオレの言い分を完全に理解しやがった。そして120点の回答を書いてもってきた。ぶらさがっている150台の端末もパソコンでなくてワークステーションだ。オレはこれに決めたよ。」

この直後である。「キミ、unixって知っているか。」という質問が飛び出したのは。参考までに言っておくが、彼は最近までD社をひいきしていた。わたしに自慢したシステムも某所のスーパーコンピューターもD社のものであった。彼が進歩したのか、D社が遅れたのか。いずれにせよ世の中は動いているのである。